始

91-558

ストリンドベルグ著作集

第貳卷

大正
5. 4. 17
内交

ストックホルムの殉教者

小泉鐵譯

東京　洛陽堂

例言

『ストックホルムの殉教者』はストリンドベルグの一八八三年作の『瑞典の運命と事變』として總括された短篇歴史中の一篇らしく思はれるけれども、今譯者はさうと斷言することは出來ない。然し其の描寫技巧の側から考へて中期以前の製作らしく思はれ、又材料を瑞典に於ける事變にとつてゐる處を思合せると譯者は多少の疑問を保留しながら

から推測することがゆるされると信ずるのである。

このことは獨乙に於て『瑞典の運命と事變』全體をシェーリングの譯に依て單行本として出版されたものと照合するならば最も容易に斷定されるのであるけれども、譯者は今其の譯本を得ることが出來ずに、クロード・フィールドの英譯で單に此の一篇を分冊刊行されたものから譯したのであれば、斷定することは避けなければならなかつたのである。

卷頭のストリンドベルグの肖像は一八八四年の寫眞である。譯者は假りに此の作を一八八三年作と見做して、それに近い年のものを擇んだのである。

此の譯中に挿入されてる羅典語の或るものは新城和一兄の手を煩はして文科大學のエック氏に尋ねたものである。茲に深く御禮を申上げる。（一九一六、三、二〇）

ストックホルムの殉教者

七月の太陽がストクッホルムに近い島の一つに立つてゐ、直下に海を見渡してゐるグライフリアルの僧院の南壁を烈しく燃え耀かしてゐた。壁の窓から半ば出した肱に靠れて一人の出家、兄弟フランシスがゐた。彼は座に蹲つて、太陽にあたつてゐた。彼は板葺き屋根の瀝青が溶けて海の中に

流れて行くのを見守つてゐた。滴が水の面に落ちる度毎に魚の群はそれが喰べられるものかどうかを見やうとその方に急ぐのであつた。然しそれは喰べられなかつた。それは水中にきら〳〵した油の輪を作つてゐるにすぎなかつた。其處に兄弟フラスシスは座を占めて見守つてゐた。其間太陽は彼の禿頭を照してゐた。然し彼の背後の大廣間には十二人の若い出家が長いテーブルの前の擡に坐はつて、彼の口授筆記の免罪の十二文章を書取つ

てゐた。然し兄弟フランシスも、若い出家達も、何方も倉皇てはゐなかつた。何故といふに今彼等は瑞典衰頽の是等の時に僧院の中で安樂なる生活を送つてゐたからであつた。然しながら一方に於ては教職者と貴族等は王國の爲めに努力し、そして征服者は最高の入札者に、擇ぶべくば一外國人にすら王國を手渡さうと待ち構へてゐたのであつた。

—— Litteris

と兄弟フランシスは矢のやうに飛んだ魚に驚いて高聲に叫んだ。

——聞きとれません、

と十二人が部屋の中から答へた。

——Litteris

と彼は振向かずに復叫んだ。

其曉鶯ペンのきぢ〳〵するのが彼等が羊皮紙の上に書いてゐるやうにきこえた。永い沈默が部屋の中に續いた。然し部屋の外はもつと活き〳〵し

てゐた。小舟が僧院を圍んでゐる林の圍に近寄つて來た。それは水手桶（バケツ）と釣竿とを有つたドミニカンが漕いでゐたのであつた。彼が林に着いた時、彼は小舟を杙に繫ぎ、鉤に餌をつけて投げた。このことが兄弟フランシスを非常に面白いことに思はせた。

——喰ひますか、

と彼は尋ねた。

ドミニカンは見上げて、

――今日は！フランシス（と彼はいつた）貴方が其處で何をしてゐなさるのか。

――フッシトを告發する者等の爲めに免罪の難有い文章の寫しを作つてゐるのです。貴方も夏の保養をおとりでなかつたのですか。

――左樣です、彼等はそれで以て彼等の出來ることをしてゐます、可哀相な若い者共だ――やあ私は失錯つた。溶かすやうな暑さですね。

――恐ろしい暑氣ですよ、Inspecteuris

と彼は部屋の中へ叫んだ、其時彼は私語の增して行くのを聞えた。

――聞きとれません、

と彼等は答へた。

――Inspecteuris 聾な人達だ．私のいふのを聞いてないのかね。其處には小魚一尾だつてゐやしませんよ、ロオレンス、壁に近く寄つてらつしやい、其處には何か見えませう。

ドミニカンは小舟を繫いだのを解いて、フラン

シスがゐた窓の下に接して漕ぎ入つた。

――貴方々の老院主はお内ですか、

と彼は壁の傍まで近寄つて來て、自分の糸を再び投げやうと用意をしながら尋ねた。

――いや、ウッブランドの結婚式に行つてゐます よ、もう十四日間も行きゝりなのです、婚禮は三週間も續くのですからね、さぞ歸つて來る時は上機嫌でせう。

――ところで、貴方はお聞きですかね、お聞き

ですかね、

とドミニカンは呼いた。

――何をですか、時に

とフランシスは答へた、そして窓からも一層乗り だした。

――大僧正が……

――一寸待つて下さい（とフランシスはいつて復口授した）Amici sincerissimi（親しき友）あの方は又何かなすつたのですか

――あらゆる制限を超越したことを
とドミニカンは答へた。彼は談話管のやうに自分の手を口に當てゝ呼いた。
――おゝ！（とフランシスは耳を欹てゝいつた）まあさういはずと、話して下さい、お話し下さい、私は直ぐ戻つて來ます。
其處で彼は一寸の間部屋の中に消えた、そして十二人の中の一人に他の者等に口授するやうに文書を渡した。彼が窓に歸つて來た時に彼は復ドミ

ニカンと話を始めた。ドミニカンは澤山の面白い話を有つてゐたに相違なかつた。何故ならばフランシスは時々彼が窓の出張りに坐はつてゞもゐるやうにそれを搖るがすほどひどく笑ひ、そしてドミニカンは瀝青が白い肩衣の上に垂つたのも氣付かなかつたほど自分の話に氣をとられてゐたからであつた。
其間に書取は大して急いでゞはなかつたけれども、筆記室で進んでゐた。それは壁を取毀つて造

られた大廣間であつた。其處には以前の二つの部屋の區劃を示してゐる汚い弓形の二本の柱がなほ見られた。吾々が既に見てゐるやうに南の壁の部屋には十二人の筆記生が坐はつてゐた、然し後の部には僧院の書庫があつた。長い祈禱檯に似た長い狹い机の上には机の裏に鎖を以て縛ばられた數百冊の書籍が置かれてあつた。其等は兎も角も飾文學で書かれ、繪畫や金の首字を以て飾られた羅馬教會の訓令や法律、聖徒奇蹟傳、祈禱書、福音

書、詩篇の蒐集であつた。

是等の寶物の前にテーブルがあつた。そして其の前に又椅子があつた。それには一人のグライフリアルが坐はり、そして眠つてゐた。彼は書庫掛であつた。時代の不穩の壓迫と、又半はフッシトの暴動及び農民戰爭に於て前兆のあつた獨乙に於ける覺醒の潮流とを恐れる處から、民衆の愛顧（それは收入の爲めに必要であつた）を得ることに望がなくはなかつたグライフリアルの僧院は一週に

指定された二日の一時間だけ誰にでも其の書庫が解放されるといふことが告知された。

精神的特權を頒たうとする自發的意向の此の寛大なる告知は一般には或る不信を以て受取られた何故ならば極く少數の人が是等の時間を一般に働かして彼等自身に其の特權を利用することが出來、そして極く少數の人が讀むことが出來たからであつた。なほ又書庫掛は唯全く無害なる書籍だけが求められのだと注意した。書庫掛の役目はそれ故

に骨の折れるものではなく、然し反對に非常に羨望せられたのであつた。何故ならばそれは邪魔されない睡眠に非常に好い機會を與へたからであつた。

兄弟マルティンは確かに彼が其處に坐睡してゐる程働きすぎたとは見えなかつた。胸の上に乘れた彼の顏は滿足を高度に現はし、健康なる發汗は彼の光澤のある額を潤ほし、そして蠅は彼の頤の大きい廣塲を這つた。時々彼は食べてゐるのを夢見

るやうに舌で唇を嘗めた。時々彼は口の角を擽ぐる蠅を追掃ふやうに手をあげた、然し彼の手は僅か途中まで來て、又膝の上に倒れた。蠅が暫らく大きい羊皮紙の書籍を吟味しやうと去つた時、彼は氣息を深くそして正しく呼吸し、唇の端を以て伴奏を保ちながら完全なる熟睡に落ちた。

さうかうする間に教團の服裝を着けてない人が書庫に入り、そして戸の近くに立留つた。彼は獅子の鬣のやうに厚い毛髪と胸の上に垂れた立派な

澤山の腮鬚とを有つてゐる身丈の高い頑狀な中年の男であつた。彼は裕福なる職人であり、そして彼の寧ろ粗大といはるべき自分の手を以て仕事をする服裝をしてゐるやうに見えた、そして所々に黑い汚染が着いてゐた。彼は注意深く部屋を見廻した、そして彼の鋭い眼は眠つてゐる出家の上に落ちた。其時彼は咳をした。眠つてゐた人は惡夢を見たやうに不愉快氣に動いた。彼の深い呼吸は止んだ。そして間もなく彼の重い眼瞼を開いた。

彼は非常に不愉快に驚かされたやうに見えた。彼は闖入者の外觀を見調べ、それに應じた態度で話掛けやうと決心した後で、彼は沈默を破つた、そして意地惡くいつた、

――君は何がほしいのかね。

――御免下さい、御坊樣、私は唯御本を拜見したいと存じました。

自分の眼から睡氣を擦りおとし、非常に不機嫌であつた兄弟マルティンは今は此の厄介なる客の汚

いそして稍破れた長靴を觀た。

――あゝ！（と彼は自分にいつた）あれは彼奴等の一人なんだ。

――所外へ行つて足をふいて來なさい、

と彼は叫んだ。

其の男は戸口から出て行き、長靴から汚穢を帽子を以て掃去り、そして再び入つて來た。

然しマルティンはそれを勘定には入れなかつた。彼は攻擊の新しい點を探した。

――君は本を見たいんだつて、そして手を洗ふことは習はなかつたんだね、

と彼はいつた。

此の警句を聞いた十二人の筆記生は大笑に崩れた。

其の男は身を引締めた、

――左様です、私は二つとも習ひました。そして其の方法を實行しております。然し貴方、仕事は手を汚くします、そして怠惰の白い手が何時も

奇麗なのではありません。

マルティンは彼の白い手をあげた、そして彼の善く貯へられてある爪を嚙んだ。それから彼は筆記生の方に向いて、

――Hereticus ille（彼奴は外道だ）

といつた。

――Licet inspiciat Es homo impudicus et valde periculosus, quem in oculis habere opus est（本を見せておやんなさい、吾々が眼を放してはならない、人を人と

も思はない、そして危険な奴だ）

と他の者等に口授してゐた出家が答へた。

戸の傍の男は頭を下げた。それが出家の羅典語の悪口を笑ふのを隠す爲めであつたか、それとも彼が古典の言語を解せない羞恥からであつたかは不確かであつた。

――それなら入つて（とマルティンはいつた）其處にあるのを見なさい。

――聖書は御座いませんか、

と其の男は遠慮勝ちに尋ねた。

マルティンは目を据ゑて見た。何故ならば聖書は禁ぜられてあり、夫れ故に隠されてある書籍に屬してゐたからであつた。然し彼はさう話すことを欲しなかつた。それで他の事をいつた。

――あります、左様、確かに。然し君は何の譯文が見たいんですか――セプテュアギント、ヴルガート、カルディア、ギリシア、それともシリア、まあいつて見なさい。

——私はギリシアのが見れるならば、大變滿足致しますが。

マルティンは恰かも顏を打擲られたやうに見えた、そして書取は一時中止になつた。知識に對する修道院の名聲、そして出家の白い手の名聲は危かつた。マルティンは最後の逃場を探した。

——新約聖書？

と彼は希臘語で尋ねた。

——新約聖書、

と其の男は同じ言語で答へた。

學問のある出家は當惑して來た。彼は嘘をいふことを餘儀なくされた。

——其は現在は藏ひこまれてある、（と彼はいつた）そして監守人が外出してゐるので、鍵が有つて行かれてある。君は此處に置いてある使徒の書を見たいと思はないかね。

其の男は彼に禮をいひ、默つて机に近寄り、そして直ぐに讀むことに氣を奪られた。

マルティンは陰鬱に取殘され、呆然と氣を失ひ、若しも窓からの驚嘆に不意に驚かされなかつたならば直ぐにも再び寢込んだであらう。其處ではフランシスが釣をしてゐるドミニカンと話をしてゐたのであつた。

――君等は聞えたか、君等は聞えたか、(とフランシスは出家に叫んだ) 獨乙人がなした新發見のことを聞えたか。

否、彼等はきかなかつた。

――左樣か、獨乙人は最早本を寫す必要のない發見をしたのだ。それを君達は好むだらう、どうだね

と彼は僞はれない喜びと驚きを現はしてペンを落した筆記生の方に向いて附足した。

机の近くにゐた例の男は聞耳をたてゝ、讀む振りをしてゐた。

――それに就いて話して下さい、

と筆記生と兄弟マルティンが叫んだ。彼は自分の充

足安易な席を棄てるほど出掛けて行つた。

――それは全く簡單なことださうだ、（とフランシスは答へた）彼等は木に文字を、丁度印形のやうに彫り、そして其等から言葉を作るのだ。

失望と驚きの叫が此の新大發見の告知に應へた。

――それだけなのか、それなら書く方が確かに速いだらう、

とマルティンはいつた。

――それは期待する（とフランシスは遮つた）

文字が一度彫られた時にはだ、其等は幾千度も刷りおろすことが出來る。

彼等は首を振り、そして信をおかないやうに見えた。

――先づそれを見なければならないね、眞當に今は根もない澤山の新奇なことがひろまつてゐる。

――左樣だ、確かに左樣もいへる（と兄弟フランシスは答へた）君等は大僧正の最近の手柄のことをきいたか、それは全く信ずべからざることだ、

然しそれは眞當だ、またと彼のやうなあんな老人があらうか！

彼等は兄弟フラスシスの周圍にもつと詳しくきからうと集つた。其時鐘が響ひた。

――沐浴の時だ、

とペンを投げだして十二人が叫んだ。

――最初の祈禱、

とマルティンが自分に十字を切つていつた。

――祈禱が……

とマルティンは折も好く止めた。何故ならば彼等が全く忘れてゐた書籍の處の見知らぬ男が其の瞬間に丁度咳をしたからであつた。それがフランシスの注意を喚起し、そして彼の正氣を呼戻した。さうして今度は彼が熟慮した上での不敬な短評を與へた。

――祈禱は恐ろしい暑氣にもかゝはらず云はれなければならない。

それから彼が立つた時に、彼は "Ave maria"（聖母

マリアよ、御前に）を誦した。それが水車を廻はすやうに響ひた。座にあるすべての者は "Secula seculorum"（幾世紀、幾多の世紀）といふ終の疊句の處で、身を少し屈めながら一緒に誦した。

見知らぬ男は十字も切らず、跪きもせず、然し音を立てずに去つた。

――あれは何といふ惡魔だ

と彼が出て行つた時にフランシスは怒氣を帶びて尋ねた。

――あれは來訪者だ、

とマルティンは答へた。

――君は暴徒を取締に足る男ではなかつたのか

――おゝ左樣だ、（と當惑したマルティンは答へた）然し彼は普通の人間ではなかつた、彼は希臘語を知つてゐた、恐らく羅典語も知つてゐたらう。

――然し彼は祈禱の際に十字の標をしなかつた、君の眼を彼奴の上に着けておき給へ、彼奴は確かに異端だ。

會集は靜かにメエラル湖に沐浴に、そしてその次ぎには彼等の午餐をとりに出かけた。

グライフリアルの出家達は沐浴をした、其後で彼等は凉しい食堂に坐はり、梭魚を草苺と牛乳と一緒に食つた。それから若い出家達は船漕ぎに行つても宜しいといはれた、――それに代はる許可は庭に行き、微睡をすることであつた。兄弟マルティン、フランシス、そして數人の年寄りの出家達が

食卓に居殘り、善い赤葡萄酒の壜を取寄せた。それは醫學上の知識を有つてゐた出家の者達が市中に流行してゐた暑氣から起る病氣に對して非常に効驗のある藥であると說明したのだ。酒は彼等の心を開き、彼等の舌を自由にした。そして彼等は直ぐに現在及び過去に就いて活氣のある談話を取交はした。厄介なる目擊者が彼等の內密の談話に何の束縛をもおくことがなかつた。彼等の會話の愉悅に何の妨げもなかつたやうに各自は他の人々が

考へた處のものを知つた。彼等の歡喜は恰かも芝居が終つた時の俳優の歡喜、自分の假面を脫ぐことが出來た時の假裝舞踏會の御客の歡喜、自分の帶を解くことが出來た時の遊興者の歡喜であつた。

――敎會とは甚だ時代後れの制度であるといふことは認められる、

とマルティンは始めた。

――現に組織されてるやうならば、左樣だ、（とフランシスは答へた）然しそれは嘗ては或る觀念、

即ち皇帝が人民の世間的の利益を見張るやうに、法王は彼等の精神的の事柄を監守すべきものであるといふ觀念に依つて動かされたのであた。然し世間的の大きさのやうに兩者の中より大きい者、皇帝が法王よりも永く續くだらう。

――左樣だ、（とマルティンが言葉を挾んだ）彼等が嘗て爲したやうに相互に摘發し合つた後で、法王の日は盡くされた、さうして教會の日がさうであつた。ローマの法王はアヴィニョンの法王を破門

する、そしてそれが反對になされる。人民は相互の凌辱に耳を傾けることを興味のあることに思ふ、そして今は唯一人として法王に信をおく者がない。

――私は誰かゞ教會と其の教師に眞當に信仰をおいたものがあつたかどうかを怪しむ。例令ば吾吾は昔の教會の彫刻師が其の中に輝かした其等の無恥の彫像に就いて何を考ふべきか。世間の人間が聖壇そのものゝ前の神聖なる禮拜の換ひ歌を作る時に、吾々は驢馬祭やカルニヴァルに就いて何を

考ふべきか。

――君のいふことは實に眞當だ、それは外道の再興だ。何故ならば外道の心には決して死ぬことの出來ない大思想があつた。彼等は常久の自然の力を禮拜した。基督教は死を免かれない人間を尊崇した。ローマの初期基督教徒は昔の社殿を教會に變へたことを吾々は知つてゐるではないか。基督教會とは圓天井形の屋根をした希臘社殿を取除けば何だ。彼は基督の姿をアポッロの古彫刻から作

りはしなかつたか。『自然には中絶がない』と異端の哲學者はいふが、彼は確かに正しい。

――君はまるで異端の哲學者のやうに話をしてゐる、（とくつきりした目鼻だちの中年の出家、兄弟アントニウスが中言した）若しも誰かゞ吾々のことを聞いたならば、吾々は危險には餘り遠くにはゐないといふことを見るだらう――それは兎に角確かだ。

――然し今は誰も吾々のことを聞いてゐるもの

はない（とマルティンは遮つた）そして吾々のいふ
處はすべての人が考ふる處にすぎない。
――フッスは同じことをもつと美事に考へた、そ
れで火に行つた
とアントニウスは答へた。
――フッスが正しくなかつたかどうかを誰が知ら
う？
とマルティンはいつた。
――左様だ、惡魔が知つてゐる、

とフランシスが答へた、そして彼の盃をあげた。
彼は洪笑の高い響に答へられた、それは塗られた
屋根の下に反響を起した。
――世界は欺かれることを欲する、まあ、それ
を欺かせてやるが好い（と彼は賞讃に勇氣を得て
續けた）ローマに於ける法王は二十人の情婦を有
つてゐる、そしてウバサラの大僧正は（斯々と總
數を考へて）犯された罪の赦免を與へてゐる。
此の事は『私は私自身をゆるす、それ故に他人を

ゆるさなければならない』といふ信條に從つた大いなる人道の特質である。

――然し彼等はフッスをゆるさなかつた

とアントニウスは答へた。

――彼は赦免を欲しなかつた（とフランシスは答へた）恵はそれを受けるものがない時に與へらることは出來ない。

――『世間は欺かれることを欲する』と丁度今君はいつたね、（とアントニウスは更に續けた）然し

私はそれが古い誤謬でないかどうかを疑ふ。『世界は欺かれる、夫れ故に吾々はそれを照らさなければならない。すべて左様すれば左様するほど世界は左様するやうに吾々に支拂ふからである』といふのがものと正しくはないだらうか。

――成程、だが吾々はそれをしてはゐないだらうか（と書庫掛のマルティンは答へた）吾々は誰にでも吾々の寶庫を開いたぢやないか。吾々は吾々の本を開いておきはしないか。

――左様（とアントニウスは遮つた）だが吾々は安全なる本を以て左様したのだ、然し危險なるものは閉ぢこめてしまつた。

然し人間は小供に小刀を以て遊ばすことを許るすことは出來まい。

――子供だつて――左様ぢやないよ、此處では然し吾々は成人を相手にしなければならないのだ。

――誰か私に話すことが出來るか（とフランシスクスは邪魔をした、彼は談話が取つた順番を好

まなかつたのだ）善惡の知識の木に何んな意味があるか誰か私に話すことが出來るか。

――私は思ふがね、（とマルティンは答へた）知識は彼等を有力ならしめることに依つて人間に善をなし、彼等に害を――何といへば好いのかな――彼等に惡をなすことに依つて害をなすのだ。

――私は信ずるがね、（とアントニウスは答へた）善惡の知識の木に依つて意味することは知識は善き果實と惡き果實と二つ有つてゐる、何故ならば

一人の爲めに善きものが屢々他人の爲めに惡であることがなるからである。或る人が町に行つて、法王が罪をゆることが出來なかつたといふことを人民に明かさせると想像するならば、その知識は人民を善くするだらう、然し法王は今やつてゐるやうに美しいシシリーを取り、奪ふことは出來なかつたらう、何故ならば彼は戰爭の費用を支拂ふ金を有つてゐなかつたからである。夫れ故に法王の使節が十四日目にフッシトに對する戰爭の材料を

得る爲めに免罪符を賣りに來る時に、吾々は人民に彼等の善の爲めに知識の果實を與へなければならない。

――いや、いや、今君は全然餘り先まで行きすぎる（とマルティンはいつた）吾は兎に角相互に裏切つてはならない、吾々は一緒に結ぼれなければならない、一緒にだ。

――吾々は吾々の背面への鞭を斷切つてはならない（とフランシスは同意した）建物が崩れるな

らば、それは獨り手に倒れる、吾々はそれに打突かる必要はない。

――吾々自身が罪人であるのに吾々仲間の罪人を告發するのは不名譽ではないだらうか、

とマルティンはいつた。

――然し若しも外の誰かゞそれをしたとしたならば、

とアントニウスは反對した。

――それは別なことだ、

とマルティンは答へた。

――然しそんな場合に吾々はその人間と何をなさなければならないだらう、

と穿鑿好きのアントニウスが强情を張つた。

――吾々だと？ 吾々は命令に服從する、（とマルティンはいつた）當局が彼と爲すべきことを決定しなければならない、そして清きものをして先づ最初の石を投げうたせるのだ。

――若しも或る人間がからした人を待構へてゐ

たとしたならば、石は決して投げられないといふことがあらうか、

とアントニウスはいつた。

――然し何故に石が苟くも投げられるだらうか、それはそんなに必然的か。人は石を投げずに生きることは出來ないか、確かに私は出來る。然し兄弟が私の心のまゝでするならば、庭に行つて、此の論爭をつゞける代りに毬投げをしやうぢやないか、夕方の空氣は涼しい、そして少しの運動は吾

吾に快い眠りを助けるだらう。誰かそれに反對があるかね。

誰も反對しなかつた、そして間もなく僧院の年長者達は閑潤なスキットル遊戯場にゐた。毬は轉がり、そして九本のピンは勢好く倒れた。

峽灣（フィヨルト）の外には葉を以て蔽はれた小舟が遠漕ぎから歸りつゝあつた。少女等は歌へ、青年等は提琴を彈ひた。年寄りの男女等は聞惚れた、沈み行く太陽を慘しげに見守つた。

一隻の小舟が僧院の壁に擦れ〳〵に通つた。

――御坊様方は此の奇麗な夕方に彼處で何を何をしてゐられるのだらうね、私は不思議だよ、

と年嵩の女がいつた。

――木の橋の上を木を曳きずつてゐるやうな音だ、

と年寄りの男がいつた。

――さうでなければ髑髏が鉛の屋根を轉がりおちるのだ、

と青年がいつた。

――何といふ氣味の惡るい音でせうね、

と少女がいつた

――可哀相な人達が面白い時間も有てないのだ

と首を傾げて年嵩の女が註釋した。

其時小さい鐘がグライフリアルの教會で鳴つた。葉に蔽はれた小舟は彼等の舟路を留めた。橈は休み、提琴は默つた。舟の人達は頭を垂れ、自分等に十字を切つた。小さい鐘は焦燥つてゐるやうに

忙はしくなつた、そしてドミニカンの僧院の鐘がグライフリアルの鐘の音を理解したかのやうに答へた。それから一時に兩方の鐘が默つた、そして僧院の高い壁の上に若い人達の聲で歌はれた"Salve Regina"（譽あれ、御空の女王よ）といふ晩の勤行の讃美歌があがつた。讃美歌の響が水上を過ぎて、南方の山がそれに木精を返した。

年嵩の女はその眼を乾かし、年寄りの男は恰かも不思議な音を見やうとするやうに顔を擡げた。

然し最後の句が消え去つた時に、橈は浸り始め、毬は僧院の庭に響を轟かして再び轉がし始めた。

――そんなに夜までも遲く仕事をしなければならないのだと見えると年嵩の女がいつた。

――私は仕事をしてゐるのだとは信じないと青年はいつた。

――それなら何と御考へになつて？と少女はいつた。

――私は馬鹿者等が毬投げをしてゐるのだと信ずる

と彼は彼女に囁いた。

鐵市場に多くの他の家屋の間に二窓幅で四層建の石造の家がたつてゐた。最下層は實は僅か一窓しかなかつた、何故ならばも一つの窓の場所が戸にとられてゐたからであつた。其の戸は大變狹くそして低かつた、そしてそれに相應した狹いそして低い廊下に開いてゐた。戸口の上には壁から粗

い石から彫られた動物の首が突き出てゐた。それは龍か、鼬鼠か、蝙蝠かに屬するものらしかつた其の眼は恰かも鐵市場で起つたすべてのことを見詰めてゐるやうに大きく開いてゐた、そして其の口は恰かも語らうと欲して其の驚の爲めに話すことが出來なかつたやうに開いてゐた。其の見詰めてゐる眼を最も惹きつけるやうに見えるものは市場の廣場の中心に立つてゐる頭手架であつた。是は笞刑囚を縛る柱が巧い具合に組合せて出來てゐ

た。其處に小犯罪者は枷を以て鞭撻され、其處で大犯罪者は吊られたのだ。

第一階の窓は板を以て構はれて店窓になつてゐた、そして其の上にはグーテンベルヒの動作活字の發明に先んじた印刷術の見本が陳列されてあつた。是等はＡＢＣ本、聖書の短句をかいた木版、暦、遊戯牌、そしてそんな種類のものであつた。是等のすべては木片に刻まれ、押壓機を用ひずに手で刷られた。此の方法はグーデンベルヒ以前數

百年間歐羅巴にて行はれたのであつた。それは費用がかゝり、又難かしかつた、そしてそれを非常に無害なる競爭者と見做した寫字生の製作高と辛じて伯仲することが出來た。店の內側には窓の前に持主、その職業から、『書札描き』と呼ばれたハンスが坐はつて、小さいテーブルで彼の技術仕事をしてゐた。其處からは彼は店の檯を見張り、立たずに顧客に接することが出來た。店の標として彼は長い桿を立て、それに毎日新奇な繪、時々は

色着きのを吊した。それが稚丁小僧や女中等の日に〳〵に新奇な注意を惹いた。或る時はそれはアダムの墮落を描き、或る時は焙器や輪具や劍と一つにゐる種々の聖者を描いた。又或る時には外國の時代物を描いた全く世間的の繪畫があつた。最後のものは好奇心の旺盛なる見物人から輕蔑された。

書札描きが既に記した僧院の書庫を訪問した數日後の朝、彼は二人の法王が一つの椅子を爭ひ、

そして其の下に口から"Anathema"（破門）といふ言葉を書いた紐を吐き出してゐる人民の群集を描いた繪畫を吊した。

店先きを過ぎた一市民は此の繪畫を見留め、立留つてそれを見た。其時彼は畫札描きにいつた。

——此の恥づべきものは何だ？

——左様です、其處はローマとアヴィニョンの聖父様方に依つてなされてゐる恥ぢ知らずなことで御座います。

とハンスは答へた。

——私は聖教會の大首頭の戯畫を吊すやうなそんな恥づべきことをどうしてするのかと尋ねたのだ。

——其の御尋ねには後程御答へ致しませう

——氣を付けろ、

と市民は脅かすやうにいつて過ぎ去つた。

やがて間もなく例の葉を以て蔽はれた小舟に若い女と一緒にゐた青年がやつて來た。彼の名はニ

ーゲルスであつた、そして彼は會議所の書記であつた。

――お早う、ハンスさん、(と彼はいつた) 何といふまあ老人達を其處へ突立たせたものですね、あゝ、ローマに於ける猊下！ 何故貴方は此處の猊下達を描かなかつたんですか。

――何故なら若しも人が個人々々を攻撃するならば、それは主義を害ねることになると私は思つたからだ。

――然し貴方は個人々々が各自の事物結附いてゐるといふことを見ながら、どうして左様はせずに本物を攻めることが出來ますか。

――入らないか、(とハンスはいつた) そんな所外に立つて、話はさう大聲ぢや出來ないよ。

ニーゲルスは店に入つた、そして直ぐにハンスの近くの座脚に坐はつた。

――貴方は大僧正が又大公堂の寄稿金を盗んだといふことをお聞きですか、

と彼はいつた

――彼は眞當にそれを盗んだのかね。

――左樣です、彼はそれを認めないばかりか、却てそのことに就いて大言を吐いてゐます。彼は世俗の人の運命を導く選ばれた者の特別の道德法を主張してゐます。彼は微々たる市民法を超越し、そして法律は場合に依つては『より高き目的』の爲めに廢されることも出來ると宣言してゐます。貴方はグライフリアルの奴等が毬投げ場を拵えた

ことを知つてますか、院主が歸つて來て、泥醉の樣で聖檀でミサをあげたことを知つてゐますか。ドミニカンの出家達がローマ風の地下浴室を有ち、そして先度の復活祭の供物を以て純粹のヤクェーム酒を五十樽も買つたことを知つてゐますか。それを皆話しておやんなさい、そして貴方は人民に奉仕をなさるのだ、其に對して彼等は貴方に御禮をするでせう。

――火刑柱を以てだ！そんなことは大したこと

ではない、然しこんな仕事の爲めには偉大なそして恥を知らない人間が必要なんだ。

――第一に偉大なる人間はゐない、何故なら吾吾は皆小さいからです。第二に恥を知らない人間はゐない、何故なら吾吾は脆弱いからです。第三に貴方は他の人間よりも脆弱くはないからです。貴方は駈げだしたのです、それは眞當だ、ワルンヘムの僧院から、そして其の事は正しかつた、然し貴方は何も意味のあることを未だなすつてらつ

しやらない。

――いゝや、私はしなかつた、然し私は裁かれない爲めに裁きたくないんだ。

――此處では裁きは問題ではありません、自分等自身で始めた裁き人に挑戰するのです、さうぢやありませんか、貴方。

――私は終夜長い夜々このことを考へた。或る時は私は自分を呼ぶ聲をきいた、然し私は豫言者として現はれる價値を感じなかつた。神聖なる人

間は其の人格を支ふることを要求せられる。

――神聖なる人間は一人もありません。それなら私は貴方に他のことを御話しませう。貴方は貴方が默つてゐるならば罪を感じられるでせう、何故ならば自分の知つてゐる罪惡を告發しない者はその罪を頒つからです。

――然し何故私がその告發者でなければならないのか。

――何故つて貴方は天賦を有つてゐるからです。

貴方は人間が單に自分自身の滿足の爲めに天賦を受けたと思ひますか。おや、貴方は其處で何をしてゐるんですか。

談話の始終の間ハンスは木を彫つた平板を小さい切れに挽くのに忙がしかつた。

――これは恐らく吾々の主義を助ける私の新發見なのだ。私は吾々といふよ、ニーゲルス、何故なら私は君を信じてゐるからだよ。私が切片に挽いた是等の小片を見給へ、其等がごちや〳〵に重

つてゐる時には二十人の騎手に蹂躙せられる不秩序な群衆よりも危險ではない、然し若し私が其等を横に纏め、本來の順序におくならば、其時には軍隊のやうに恐るべきものになる、そして若しも彼等の先頭に赤と青の旗手をおくならば、彼等は歡呼し、勇氣付いて戰に行く、そして彼等は善き指揮者を有つならば、常に勝利を得るだらう。

――其等は文字だと思ひます。

――其等は文字だ、文字は言葉を編み、そして

言葉は思想を現はす。

――何といふ簡單でせう、誰も是前にはそのことを考へなかつたんでせうか。

――若しも此の技術を必要としたならば、永い以前に發明されたゞらうね。

――貴方はそれを何處で知つたのです、

とニーゲルスは尋ねた。彼は考深くなつた、そして彼の赤鬚を撫でた。

――私は彼等が一般に自分等の知識を惜しんで

ゐる場所――グライフリアルの書庫でそれを知つたのだ。そして同じ場所で私は寫字生がどんなに喜んだかをきいた。

――何故の喜び？

――何故つて彼等はもう書くことはいらないだらうと思つたからさ。

――最早書くことがいらなくなれば、それは確かに結構でせう、貴方は貴方の發明を市長の處へ有つていらつしやらなければなりません、さうす

ると其時には私は坐はつて、命令や拂込高を書取る必要がなくなります。それは大したことだ。

――私は又左様する心算りだ。然し私は他の目的を有つてゐる、そして私の信ずる處によれば もつと大きい目的を。

ドミニカンの出家が店先きを通つた、そして二人の法王の繪畫が彼の目をひいた時に彼は立留つた。彼は氣付かずにゐるハンスに怒つた顏色をし見る間に其の繪畫を破棄てゝ、そして消え去つた。

――君、ニーゲルス、(とハンスは續けた) 君は若くある、そして主義を信じてゐる。然し君は確かに何時もそんなに熱心で且つ熱中してゐられるかね? 君は金持ちの娘と結婚するならば他の觀察點から物事を見るやうになりはしないかを恐れないかね?

――私が? 決して恐れませんね。そして尙一事を貴方に申しませう。坊主等が自から信じもしない教義をひろめてゐる腐敗した敎會を顚覆するや

うに私が貴方に論議した戰に於て貴方は貴方の味方にあらゆる知識ある市民を有つてゐるといふことです、左樣です、そして貴方は出家等の間にも有力なる友達を有つてゐることを私は知つてゐます。私は或る時アントニウスといふフランシスカンに會ひました、その男は或る話をすることが出來ました。然し充分です、お進みなさい、さうすれば貴方は如何に群衆が貴方の背後に群がり立つかを御覽になるでせう。ニーゲルスは第一にそし

て先頭に。此處に私の手は用意が出來てゐる。だが然し今は私は行かなければなりません、何故なら私は自分の許嫁の來るのを見に、さよなら。

ニーゲルスは去つた。然し彼が道路に出た時に彼は振向いた、そして例の繪畫が破棄されてることをハンスに氣を付けさした。ハンスは不愉快な樣子をした、然し直ぐに長い桿を下ろして同じ繪畫を吊した。

それから彼は再び自分の仕事に向つた、そして

て小さい木片を幾列にも整理させ、それを更に木の箱の底に整列させた。

店の背後の戸が開かれた、そして彼の妻が死んだので彼と彼の子供の爲めに家事をとつてゐた老妹が現はれた。

——あのニーゲルスが復此處へ來たんですか、(と彼女はいつた) 私は彼れの空々しい聲をきゝました。

——ニーゲルスは此處にゐました、然しお前は

彼に間違つた考を有つてはいけない

――狐を御氣を付けなさい、貴方々は私がどの言葉だつて皆聞えたほど大聲でお話をなすつた。全く今は彼れがいつたことは彼れの意味のやうで御座いませうが、然し明日はみんなそれを取消しませうよ。貴方はあれをお信じなさいますな。矢張り、ハンス、私は貴方がなさることは正しいといふことを知つております、そして貴方が正しいことをなさるのならば、貴方は御自身の道を一人

でおいでになることが出來ます。貴方がキリストの爲めにお苦しみになるならば、貴方は然し他の人達の復讐的の計畫をお助けなさいますな。

――そんなことを話すな、老ひぼれカレン、吾吾は吾々の罪に苦しんでゐるのだ。そしてそれはすべての終末だ。私が一二時間ばかり市長の處へ行つて來る間此處に坐はつていておくれでないか。そして所外の書に目をはなさずにね、何故なら今日はそれが非常な注意を惹ひてゐるからね。

ハンスは彼の上衣を更へて會議所に出かけた。其處で直ぐに市長に會つた。市長は善意のある人であつた、彼は教職者や出家等が眞理として與へた誤謬に關して人民の蒙を啓くことを善んでなさうとしたが、然し出來なかつたのだ。彼は熱心にハンスの新發明の利益に就いての説明に耳を傾けてゐた。そしてそれを直ぐに會議所で用ふることを約束した。それから彼等は難かしい問題を論爭した。

――君が吊した畫に就いて訴えがあつたが、（と市長はいつた）氣を付けなくちやいけないね。

――僕は出來ない。

――君の友達は君が畫を以て主義を害したといつてゐるよ。

――若し人民が讀めるのならば、僕は本を書くだらう。僕は理解される爲めには彼等の言葉を話さなければならない。

――君は又本を書かうと欲してゐるのか。

――左様だ。

――ハンス、君はどんな運命を君自身の爲めに招でゐるか御存じかね。

――僕は知つてゐる。僕の恐れるものは唯一つだ。私の子供だ。

――吾が友よ、君は相互に助けるといふ同胞のあの秘密の誓約を知つてゐるだらうね、君はそれを信じないのか。

――或る時は、然し或る時は信じない。すべて

の人間は斫りつける斧を有ちたがる、然し一人として柄を摑まうとするものはない、僕は何方も有たうとしない、然し自分は自分の意志に逆つてそれを摑む。僕はどんなに背後に立つてゐる者等が自分を先きに押しやつてゐるかを感じてゐる、さうして僕は自分自身を隱さない。話してくれ給へ兄弟――君が人殺しに會つた時、君は殺人に關する法律を朗讀することを以て滿足するか、君は其奴の耳を摑んで、其奴を吊しはしないか、君は他

の何かの方法で人殺しを罰することは出來ないか。僕はすべての大僧正が無頼漢だとはいはないだらう。何故なら其時には僕は嘘を吐いたことになるからね。然し近親相姦の犯罪者で泥棒の現大僧正は無頼漢だ。その神聖なる尊崇を拂はれてゐる彼に僕は烙印を捺したいのだ。僕が攻撃するのは教會の頭首としての法王ではない。左様ではない！僕が攻撃したいのは不品行者、猊下と稱する位階を有つてゐる暴君、ベネディクトだ。

——君はさう思ふかね、縱し彼等の罪を定めたのは僕でなく、彼等自身の罪が法律に依つて彼等の罪を定め、そして僕が唯宣告を申渡したとしても、判事として僕が誰かを死刑に定めた時に自分が喜びを感ずるといふことを？宣告を行ふ刑吏は人殺しではない、然し彼の睡眠は始終苦しめられる。

——刑吏になるのは嬉しいことではない。

——然し一人はなければならない。聖教會と呼

ばれる全團體は百の首を有つてゐるハイドラである。九十九は再び成長する、然し彼等の中の一つだけは死をまぬかれない。其の一つを切り去つて仕舞ひ！

――僕はやらう！それならもうさよなら。僕の子供のことを思つてくれ給へ。僕は僕の四人に就いて考へたい、そして彼等は僕が彼等の中の誰かを裏切る前に僕の口から僕の舌を扭ぎとつても好いんだ。

――御機嫌よう、兄弟よ。吾々が詐欺を見て、然しその假面を剝ぐことを敢てしなかつた時に、吾々は何を苦しんだか、吾々だけが知つてゐる。天は吾々の苦闘を見ておゐでだつた、そして神様は眞理を隱すことに於て吾々の罪をお赦るしなさるだらう。然しこのことは最早打擲つておくことは出來ない、さもなければ吾々はすべて嘘吐きになるだらう。高檯は用意されてある、犧牲は待構へられてある、人民は天から落ちる火とそれが燃

やされることを待つてゐる。君の手を以て火を地上におろせ、さうするならば人民は信じ、そして自由にされるだらう。アーメン、イエスの名に於て！

——アーメン！

とハンスはいつた、そして去つた。

法王の使節の來るのが秋の間中無駄に待たれて

ゐた、然し今十一月になつて彼は來た。そして彼は此の世界の有力なる主權者として來、二百人の騎馬の扈從と出家の全群衆を連れてゐた。ストックホルムは祝ひの裝飾に埋もれ、華美な色彩の布が窓々から垂れ、旗は家々の屋根から飜つた。教會は開けひろげられ、鐘は響き、風琴（オルガン）は鳴らされ、ミサは歌はれ、芳香はたかれた。ストックホルムの大會堂は華美に飾られ、燈火はすべての檯上にとぼされ、すべての傍寺の祈禱は蜂の巣の群蜂のや

うに響いたといけれたほどであつた。煙は聖者達の肖像がそれで曇つたほど喫煙室に充滿した。造花や樅の枝が燭臺を飾つた、そして暗い屋根から聖者達の肖像のついた旗が下つた。高段は大祝祭を祝ふ爲めに赤色の布を以て蔽はれた。教會の門は先席の權利を有する者等が彼等の席をとるまで聖殿から群衆を遠除ける爲めに兵隊に守られた。

最初に會議官や旗手を載いた都市團體がやつて來た。彼等は裸頭で、手に蠟燭を有つてゐた。次

に基督の教團の兄弟達が非常に大きいモンストランスを擔つて來た。各組合は自分の傍寺の前に留つた。次に黑衣の兄弟、又ドミニカンの出家達が黑い木から刻んだ十字架を頭に載せ、顏を覆ふて彼等の僧院から來た。彼等の黑と白の外袍を着けたのが、黃色の蠟燭の周りに翻々する蛾のやうであつた。次にリッテルホルムの灰色の出家達が來た。次に儀禮服を着た宮廷の侍臣が來た、然し王自身は此の戰爭には缺席した。次に市長達と市會議員

達が續き、そして其の後方は護衛の兵隊に打止められた。教會が一杯になつた時、すべての人が懺悔の詩篇 Miserere Mei Domine.（主よ、吾を憐み給へ）を合誦した。

それから大僧正は高段の前に歩を運んだ。彼は死者のやうに白い容貌をした五十歳の男であつた。彼の眼は暗碧色の輪の中に深く沈み、暗い皺が眼角から出來、口は極く小さく開け、狼の齒のやうに白く鋭い齒並が現はれてゐた。

歌はやんだ。そして法王の使節が扈從を連れて大會堂の大門に入つて來た時に、風琴だけが大鼓と喇叭の伴奏に雷のやうな勝利の行進曲を奏した大僧正は檯の段を降りて、使節の方に明道を下つて行つた。彼等が會つた時に、彼等は跪いて、互に接吻をした。大僧正が先きに立ちあがつた、そして叫んだ、

――貴方々の御頭をおあげ下さい、おゝ、貴方方賓客よ、光榮の君主は來たられるで御座いませ

う、主の御名に於て來たられた方に祝福あれ、ホーザンナ！

風琴はやんだ、そして大僧正は基督の代表者なる使徒に歡迎の辭をのべた。その人は救世主の御召命をきゝ、そして眞實を聲明し、罪の赦免を與へる爲めに諸々の國に出向ひたのであつた。ローマの聖父は遂に基督の惠の分前に與づからうと熱望する北方の小さい群れの嘆息をきゝ、彼等にそれを與ふるために自分の弟子の一人を遣はしたの

だ。尙附加へて彼は此の主の使徒がその永いそして危險なる旅行に於て遭遇した困難と危險を述べたてた、そして他のホーザンナを以て結んだ。

法王の使節はその答辭に於て大僧正を『眞理の徵證者』と呼んだ。それは大僧正が彼（使節）を『使徒』と呼んだからではなく、然し彼が眞當に眞理の證徵者であつたからであつた。

次に彼は自分の來訪の理由を打明けた。聖父と聖教會とは種々異なる名の許に獨乙に於て彼等の

頭を擡げた反基督徒から、五十年前に彼等の首領の一人、其の名をフッスと呼ばれた者が燒殺された。にも係らず、彼等から攻撃された。聖父は氷風のやうに葡萄圃を吹き荒らした處の其の時代の不信仰を目擊して痛ましく惱んでゐられた、そして彼は彼の人民の上に血の涙を注いだ。然しけれども今は彼は正義の憤怒に捉へられた、そして辛抱强くそれを堪忍するのが彼には最早正義ではなくなつた。然し彼は彼等を笞杖と武器を以て膺懲し、

彼の足を以て蛇の頭を踏みつけなければならなくなつた。夫れ故に彼は基督教國の全體に一人の如く立ちあがり、基督の足許に地上の持物を寄捨しそしてそれに依て彼等自身の爲めに天上の永遠の所有を購はんことを訴へた。

其處で二人の僧侶が高段に進んだ。そして兩側に出家と市民とが居列んでゐた明道は空になつた。其時ドミニカンの院主が使節の前に歩み出て、歡迎の辭を讀んだ、其後でそれを使節に手渡した。

人々はそれが怠窟になりだした、そして耳打ち話が待つてゐる群衆の中に始つた。『大釣手』といふ綽名のドミニカンのアンドレアス、即ち吾々がグライフリアルの僧院に對つて朝の釣りをしてゐたので知合の彼が、自分の隣人を振向いて囁いた、

――大僧正が眞理の證徵者のやうに見えますかね。

――私は火夫のやうに見えると思ひます、

と其の他人が答へた。

――火夫?

――左様です、眼の周圍があゝ眞黒では。

今度はグライフリアルの院主が挨拶の辭を有つて前に進んだ。書庫掛の兄弟マルティンは滑めらかな石敷の上に眼差を投げ、その頭を寫字掛の兄弟フランシスの方に傾けて囁いた、

――上等な毬投げ場が出來るね!

次には市長が前に出なければならなかつた。彼は震へる足をして進み、眼を床に着けてゐた。彼

は羅典語を知らなかつたので、彼の辭を獨乙語で書かざるを得なかつた。彼は使節に市の挨拶を捧げた、そして彼等が非常に永い間待つてゐた處の使徒を見ることをゆるされたのは非常に幸福であると述べた。彼は附加へて、都市は詐欺との苦鬪にて眞理を支ふる爲めになし得るすべてをなすだらうといつた。

此處で彼は上を見た、然し思はず眼差を一方に投げた、そして其處に柱の側にハンスが彼を烈し

い眼を以て見守つてゐるのを見た。僅の間會堂の中には完全なる沈默があつた、そして市長は大僧正の乾いた咳に自分の注意を呼戻されるまでは啞者であつた。それから市長は續けた。

――市長等は、(と彼はいつた) 常に天位の最强の支持者であつた彼等は又一なる眞敎會の護衛者であるで御座いませう。

彼は其の先きを讀めなかつた、そして彼の顏は陰欝なる表情をとつた。彼は祝文を手渡し、禮を

して自分の席に復つた。其時風琴が鳴り始め、歌が再び起つた。然しそれは氣が拔けたやうに響き熱誠に於て缺けてゐた。何故ならば歌手は疲かれそして空腹であつたからである。

――今日は吾々は何をしやうつていふのか知つてゐるかい？

とマルティンはフランシスに囁いた。

――罪の赦免！

とフランシスは答へた。

――市長の犬が立つて、あのやうに嘘を吐くこと。

――彼はやむを得なかつたのだ

唱歌隊が詩篇 Jubilate recordate（樂しめよ、思も出せよ）の詩篇を歌つた。其間に教會吏が其の中には會集が眞理の敵に對して聖教會を護るために捧物を投げ、罪の赦免を返報（かへし）に受ける爲めの大きい箱を運び出した。其時大會堂の大門が開け放たれ、兵隊は群集を中に入れた。華美なる衒燿に眩まされ

芳香の雲に醉はされ、風琴と唱歌隊の奏樂に動かされ、大僧正と列んで高壇の奥に見られる基督の使徒の前に聖い畏憚に提へられて彼等は跪き、そして其の姿勢で永い明道を呻きながら、溜息をつきながら匍匐した。それは心を震動させる光景であつた、そして高段の二人の僧官は十字架の下に賽錢箱を有つて立つてゐる自分達の方に明道を進んで來る男女老幼の流れを自分達の前に見た時一瞬間非常に強く動かされたやうに見えた。然しこ

んな光景には慣れてゐるので　彼等は直ぐに我に返つて恰も二つの神聖なる肖像のやうに堂々と起立してゐた、その前に人民は膝行した、そして賽錢箱は恰も高段のやうであつた。

三時間人民の流れは其處を過ぎた、そして高壇の小さい戸口から外に出された。使節と大僧正とは疲勞と空腹とから彼等の白色の法衣のやうに白かつた、夫れ故彼等は倒れないやうに時々高壇の欄に倚りかゝらねばならないほどであつた。そし

て彼等は人民が來、そして彼等に接吻することが出來るやうに双方の足を交互に立てなければならなかつた。

唱歌隊は疲勞の爲めに歌ふことをやめた、そして唯風琴だけが哀れな調子をつゞけてゐた。出家達に中音に話した。そして都市國體の會員さへも彼等の服役に疲かれて階段や柱の臺石や壁の出張りや何でも見付けることが出來たものに坐つた。

到當兵隊自身が力敗けがした、大會堂の門は閉

ぢられた、そして人民の流れの終りが見られるやうになつた。所外には救ひを求むる群集の嘆息があつた、そして賽錢箱は執事が盤を以て前方に行き、寄捨の殘りを受けなければならなかつたほど一杯になつた。風琴の最後の音が消失せた。そして使節と大僧正とが默禱の爲めに跪いた。然し丁度彼等が自分達の顏を隱くす爲めに手布をとらうした時に、彼等は激しく震へた、そして恰度自分達の眼を信ずることが出來なかつたやうに相互に

見交はした。彼等の手布から祈禱壇の上に二枚の紙が落ちたのだ。それには

『罪の赦免は購はるゝことが出來るか』

そして下に

『富者の神の國に入るよりは駱駝の針の孔を穿るは却て易し』

と大きい文字で印刷されてあつた。

恰度一様の壓迫に捉へられたかのやうに、彼等は紙片を自分達の衣嚢に押込んで、會衆の上に祝

福を與ふる爲めに振向いた。然し其處には全教會に渡つて風が枯れた葉の堆積を吹きとばす時のやうな響があつた。颯鳴と私語とがあつた、そして他の出家達は誰も彼もその手に群集が去つた後で拾ひあげた紙片を有つてゐた。其には

『罪の赦免は購はれることが出來るか』

と印刷されてあつた。

大僧正と使節は聖房に入つた。其時教會の中に不滿の聲が起つた、それが喧噪に高まつた、そし

て遂には叫喚になつた。

半時間の中に教會は空になつた。然し床は紙片で白かつた。

ハンスが午後自家に歸つた時、彼は妹が彼女の小さい部屋で縫物をしてゐるのを見た。店は大赦免祭の所以で閉ぢられ、窓は締められ、そして火が爐に燃やされてゐた。

――ニーゲルスが此處に參りました、

と年寄りの女がいつた。

――あゝ、(とハンスは返事をした) 何か用があつたのか。

――彼はひどく困つておりました、自分の地位を失つたからと申しまして。

――彼が眞當に?

――えゝ、命令書が今は印刷されますので、市會は五人の筆記生は用がなくなりました。彼等は自分達の中で誰が出て行くべきかといふ骰子を投げましたら、それが彼におちました。然し彼が申

しますには、一番好くないことは未來の舅が約束を無にしたことださうです。

――可哀相な奴だ、どんな善い事でも何か惡い事を運んで來る。一人の人間の死は他の人間の麵麭を意味する。

――左樣で御座いますね、貴方は何時も彼に親切にしておゐでだつた、それを彼も此處に居りました時認めておりました、そして貴方の印刷機を借りて參りました。

――借りた――私の――印刷機を？

――はい、彼は貴方が持つて行くやうにお許るしになつたと申しました。

――私が？

ハンスは急いで店に行つた、そして見廻した。それから彼は再び部屋に入つて來た。

――私は決して彼にそれを持つて行くことを許るさなかつた。まあ彼が小さい方のを持つて行つたのは仕合せだつた。彼がそんなことをいふとい

ふのは不思議だ。

――えゝ、えゝ、だから私が申しましたやうに彼を決して信用なすつちやいけません。それはさうと、教會では見事で御座いまして？

――終が好かつた。

――私達は多分お仕舞は見られなかつたでせう

――子供は何處に？

――お隣りで遊んでおります。

――私は彼奴がほしい。

―直ぐに參りませう、貴方のまあお痛はしい御様子は、御兄様。

―俺は死ぬほど苦しい、荷は俺には餘り重すぎることが恐ろしいのだ。

―基督様をお思ひ遊ばせ。

―俺はしてゐる、然し俺の心は自分の子供を、そしてお前を思ふ時に俺の胸は沈んでゆくのだ。

―貴いお坊ちやま、貴方の道が正義のものならば、誰も貴方を滅ぼすことは出來ません、そし

て私はそれが正義のものであることを知つております。若し私が不平をならし、貴方のお邪魔になりはしなかつたと私は貴方の爲めに恐れてゐた處で御座いました。然し若し一番可けないことが參りますとも、貴方は他人の魂をお救ひになる爲めにお死になるのです。けれども、ハンス様、不善なる人達の爲めにお弱りなさいますな、貴方は震へをお見せになつていけません、何故なら彼等は貴方が後悔したと申しませうから、そして貴方は

貴方のお子供の母親に直ぐにお會ひなれるとお思ひなさいませ。

――左様だ、彼女が彼を見なかつたならば、彼女は俺に何といふだらう。

年寄りの女は立つて、眼を光らせて答へた。

――彼女は貴方が貴方の子供とすべての子供とを詐欺の精神から救ふ爲めに苦しい死にいらしつたと申しませう、そして貴方は救世主の王座にお坐はりなさるでせう。それが彼女の申すところで

御座います。

彼女は外に出て行つた、そして遊んでゝ全く得意になり、遊戯をやめて自家に歸るのを欲しなかつた八歳の男の子をつれて歸つて來た。彼は不機嫌に隅に坐はり、そして父に挨拶をする態度を示さなかつた。父が子供の額から毛髪を掃つて彼を撫けやうとした時に、彼は肩を怒らして振向き去つた。父の顏の深い苦痛の様子は彼の年寄つた妹を子供を叱らうと思はせたほど感動さした。然し

ハンスは彼女を鎮めた、そしていつた、

――それは人間の本性だ、吾々もすべてあゝであつたのだ。

それから彼は小さい店に入り、燈火をつけた。今は何かおこらなければならなかつた。此處の狹い部屋には文字の小軍隊が指揮され、大戰爭に引卒されるのだ。彼は自分の上衣を脱ぎすて、草稿なしに活字を置き始めた、何故ならば彼は同時に文句を作つたからであつた。昨日は彼は僅に行爲

を攻撃したにすぎなかつた、今日は彼は行爲の主體を攻撃しやうと欲した。

彼は何等妨害さすことをさせずに夜おそくまで仕事をした。眞夜半に彼は寢室に入つた、其處には年寄りの女と子供が寢てゐた。彼の子供は遊戯を夢に見ながら眠つてゐた、何故なら彼は笑つて手を動かしてゐたからであつた。彼の父は暫く見入つてゐた、悲しい想思と痛々しい自責の感情が自分の心中に起つた。可愛らしい小さい指が背て

仕事樫の周圍を攪さまはし、終夜の勞力を無にした時に、彼は定規を以てどんなに此の可愛らしい小さい指を打つたかを思ひだした。彼は今は如何にひどくそれを悔ひたらう。彼は身を低く屈めて小さい手に接吻した、手の主等は青い毛織の花の牧場を林檎のさがつてゐる基督降誕祭樹の森の中をクリスマスの市場から買つて來た小さな羽翼のある赤い馬の幻の手綱をとり、それを驅けさせてる夢を見てゐるのだ。

それからハンスは子供を持ちあげ、彼の頤の下に敷布を平に布き、默禱を誦し、そして再び自分の仕事に復つた。

鐵市場の石造の家を包んだ同じ夜景の暗黑が又グライフリアルの僧院の上を蔽ふた。冷い西北の風がメエラル湖から雪の粉花を長い建物に吹き捲くり、北側の小さい窓の角製の古い割目のある板の一つに吹き込んだ。其の割目は光つてゐる赤黄色の狼の眼のやうに暗夜の中に輝いてゐた。何故

ならそれは燈火が内部に燃えてゐたからであつた。燈火の傍には寫字生のニーゲルスが小さい暖かい部屋の中に畫札描きハンスの小印刷機の上に屈んで、彼の赤鬚を撫でながら坐はつてゐた。然し彼は一人ではなかつた、何故なら彼の側には書庫掛のマルティンと寫字掛のフランシスが、各自に手にライン葡萄酒の盃を有つて立つてゐたからであつた。

――私は彼を摑へることが出來るとは思はない、

(とニーゲルスはいつた) 彼は聖者ではない、然し彼は何も惡るいことをしなかつた。

――そんなことは今現在の問題ではない、(とマルティンはいつた) ハンスは自分の側に人民を有してゐる、何故ならば彼は正しいからだ、然しそれは吾々の關する處ではない。問題は彼の人望を如何にして奪ひ去るかといふことである。

――それは全くだ、(とニーゲルスはいつた) 然しすべての手段は許るされるだらうか。

――すべての手段は許るされる。

――然し私の良心は仲々そのことをゆるさない とニーゲルスは反對した。

――無意味なことをいふもんぢやない（とマルティンはいつた）時は充分に熟してゐる、そして明日は彼は投げだされなければならない。要點を摑へろ、それならさあ、吾々は何と書かう。彼は妹と一緒に住んでゐはしないか。非常に結構だ。それなら書け『彼は彼の妹と共に住む』その上に彼

はワルンヘムの僧院を棄てた。それなら書け、『彼は僧院から追ひ出された、そして今は落書（ラングブーン）に依つて復讐をしてゐる』尙又彼はフッシトだとはいふことは出來ないかね。

――左樣だ、彼はとうにフッスの書いたものを讀んでゐる。然し若し吾々が彼をフッシトだといふならば、彼は火刑柱に引張りだされるだらうが。

――非常に結構だ。それなら彼をフッシトと呼ばう、それは好い考だ。然し吾々が彼に復讐すること

とを望んでるやうに思はせない爲めには、人民がその第一歩を起すやうに煽動されなければならない。彼が家の中に異端の書籍を有つてゐるといふこと、又彼は妖術を行つたといふことを書け。

――左様だ。然しそれは恥づべきことだ、（とニーゲルスはペンを嚙んでいつた）彼等は彼の店を暴らすだらうが。

――確かに彼等はするだらう、それならそのことをかけ。

――君は立派な男だ

とフランシスは彼の手を火に暖めながらいつた。

そして信仰深い人々が僧院に寄進した赤色の蠟燭は其等がその光を注いでゐた行爲の上に血の赤い涙を流した。其等は人間の發明の中で最も貴きものゝ一つを卑劣なる目的に供した汚れたイスカリオトの手を照らした。

十一月の太陽が大赦免祭の翌朝雪に蔽はれた道路と鐵市場とを照らした。ハンスは何時ものやうに店に坐はつてゐたが、疲勞して見えた。恰かも死刑に定罪されて、自分は死ぬのだ、然しその何時かは知らない人のゝやうな彼の顏貌には不思議なる沈着の表情がおかれてあつた。戸口の上の石

の頭は白い霜で眞白になり、垂氷がその口から垂れてゐた。頭手枷は何時ものやうに物凄く見えた、然し路上に動いてゐる人達は彼等の平生よりは一層活き〳〵してゐるやうに思はれた。彼等は道角に立留り、字を讀むことを知つてゐる者、紙片から大聲に讀みあげてゐる者の周圍に集つた。聽衆の群はぶつ〳〵いつて、散じた。次に其處には新奇な群集がやつて來る、それは耳を傾けては、又順順に散つて行つた。斯樣なことが鐵市場ばかりで

なく、あらゆる廣場で起つた。其處には又或は地面に置かれ、或は壁に貼られて刷りものゝ貼札が見出された。激昂の大きさは次のやうに書かれた貼札の標題から測ることが出來た。

『完全なる證明、第一、大僧正は眞理の證徵者に非ること、第二、法王の使節は使徒に非ること、第三、聖父は神聖に非ること』

ハンスが彼の窓の處に坐はつてゐた時に、其處に戸を叩く音がした、そして家主がいきなり入つ

て來た。

――明日、畫札描きハンス、君は自分の道具と家族とをつれて此處を出てくれ。

ハンスは不意擊を喰らつたにしては驚かずに見上げた。

――何故なんだ、俺がこんなことを尋ねて好いのかどうかは知らないが。

――此の所以でだ、

と家主は答へて、そして讀み易くはあつたが、拙

い印刷の貼札を彼に渡した、彼は讀んだ、

『大叛逆人にしてフッシトに關する眞實の話、彼は畫札描きハンスといふ僞名の下に妹と共に住み、ワルンヘムの僧院から追放されたる復讐の爲めに神及び聖晩餐を拒否する異端の諷刺畫を最も神聖なるものに逆つて發行した』

ハンスは自分の上衣を身の周りにしつかりと引張り、恰も凍えたかのやうに感じた。彼は是は豫見してはゐなかつた。其の時彼は中の部屋から叫

聲――人が氷の中に倒れた時のやうな鋭い叫聲をきいた。彼は跳びあがつた、そして彼の妹がその足許に運命を決すべき貼札を有つて硬くなり、默つて床の上に倒れてるのを見た。隅には彼の子供が泣きだすことも爲し得なかつたやうに箱の上に小さくなつて自分の前を見詰めて坐はつてゐた。

ハンスは立ちながら、彼の妹を正氣に歸らさうとしたが力及ばなかつた、そして彼は彼女に讀むことを敎えた時間を呪つた。到當彼は身を屈めて

彼女の手をあげた。それはまだ溫く、柔かであつた、然し脈搏はとまつてゐた。彼の第二の考へは『自分の子供を誰が見守るだらう』といふことであつた。彼は最早その先きを考へることが出來なかつた。何故ならば今度は市場から入亂れた不穩の聲が起つたからであつた。彼は店に入つて行つた、そして彼は大群集がその前に集つてゐるのを認めた。すべてが一度に喋言りだした、そして店窓の方に顏を向けた。群集が明るい斑點と光る點を有

つた眞黑い壁のやうであつた。ハンスは窓に歩んで行つた、然し怒號に依つて迎へられた。彼は店棚に乘りかゝつて、彼は話さうと欲するといふ態度をした。其處には一瞬間の沈默があつた。

――諸君は何を望まるゝか、

と彼は震聲で尋ねた。

他の怒號が彼の問に答へた。彼は騷擾の主動者の誰かを見分けやうとしたが、暗かつた、そして彼の眼はくらんだ。突然群集の中心に動搖がある

やうに見えた、そして其處には彼が友達の顏だと充分に見別けられた數人の青年が前方にのしかゝつてゐた。然し以前には信賴と歸依とを以て彼を見合せた彼等の眼は今は怒火を投げてゐた。そして相互の誓を堅くする爲めに屢々彼の手を握締めた彼等の手は今は强脅するやうに彼に對してあげられた。その顏が憤怒に熱してゐる彼等の中の最も年少者が店棚の方に前進して、中音にいつた、

――叛逆者！貴樣はその汚れた手を以て吾々の神

聖の道を潰した。貴様は自分の復讐の爲めに吾々を道具にした、糞坊主、貴様は僞りの豫言者であつたんだ、恥ぢ知らず！

――それは嘘だ。（とハンスは答へた）自分は鞭撻ち懲らした、然し自分の復讐はしない。神の攝理は弱い人間の間に懲罰の道具を探す時に餘り撰擇はなさらない。何故天は人間を目覺まさうと欲する時にその火、その洪水、その地震を用ゐないかを天に尋ねるがいゝ、それが恐らくより賢いこ

とだらう、何故ならば其時は諸君は信ずるたらうから。そして彼等に反對せよ。現に征服してゐる虚僞、虚僞の父は無力となるだらう。キリストが前に進み出られた時に、エズス・クリストを諸君は信じたか、そして學者とパリサイの假面を剝ぎ去つたか。否、諸君ば『彼』を諸君が詐欺を彼の審判となした後で彼を十字架にかけた。畫札描きのハンスが彼よりも幸福な運命を欲してゐると諸君は考へるか。

其處には更に一般の咆哮があつた、その中から一つの叫がきかれた、

――彼は自分をキリストに較べた、背瀆者！彼に石を投げろ！

そして其時眞黑な全群集が雷雨に曲げられた麥のやうに石を探す爲めに地面に屈んだ。然し雪が道に深く降つてゐた、そして群集の足がそれを硬く踏みつけた。然し狂熱は創意のあるものである。彼等は窓板や水管の垂氷を碎き、又店棚や屋標や

戸の取手を壞した。

ハンスは背後の部屋に飛び入り、中庭に開いてゐる戸を横切つて飛ばうと子供を腕にとつた。然し突然に若しも自分が逃げるならば誰も彼の道を信ずるものがないだらう、そして自分に不義をなすことになるだらうといふ思想が彼に思ひ當つた。彼は子供を部屋の中につれ返つた。然し一瞬間家が彼の上に崩れるやうに感じた。耳を聾する程の喧騒の中を顏に垂氷を打ちつけられた子供の叫び

が貫いた。ハンスは脆弱い體がその節々が震ひわないゝいてゐるのを感じた、そして木の彫刻のやうに硬く重くなつた。彼は逃げやうとはしなかつた、然し又盗賊の手に此の最愛の寶を任かすことを欲しなかつた。彼は戸に閂をかひ、彼の子供をとつて床にねせ、褥を以て頭を包み、そして丁度崩れて來る屋根から守るやうに自分の體を子供の上に蔽えかぶせた。

衞戍兵が戸を開破つた時に、彼等は彼の倒れて

ゐるのを見出した。彼等が入りこみ、彼等が友達ではなかつたのをハンスが見た時に、彼は敵の手に落ちたことを神に感謝し、最愛のものとの訣別をする爲めに一瞬間の猶豫を僅に願つたにすぎなかつた。彼は彼の最も多く愛した二人が人間の惡意から最早恐れる何物をも有たないことを自分に確かめた後で、彼は落着き、喜んで衞戍兵の手に自分を任した。

王城の記錄室にその功勞のある行爲に依つて王室書記に陞せられたニーゲルスは坐はり、王及び市會に依つて發布せられる命令の見事な寫しを作つてゐた。當局は丁寧に王の特別の許可なしに個人がそれを私用することを禁じた。獨乙から傳はつた新發明及びその進歩は最近の事件に依つて示

されたやうな恐るべき惡用に門戸を開いたので疑問になつた。このことはハンスの大僧正に反對した貼札には言及したが、ニーゲルスのハンスに反對した告訴には言及されなかつた。

上席の書記が眞直ぐにニーゲルスと對合つて同じ机に坐はつて、ニーゲルスの書くのを見てゐた。其間火爐の傍には監督書記が坐はり、彼の部下を取締りながら見守つてゐた。

其時監督書記がニーゲルスに尋ねた、

——何處へ君は塲處を見付けやうと思ふかね。

——私は全く見付けることが出來るかどうか解りません（とニーゲルスは答へた）然し私は兵士等の間に立つてゐやうと考へました。

——君さへ好いなら、私の屋根下の窓を使つても宜しい（と監督書記はいつた）其處なら誰よりも好く見ることが出來る、私は君も知つてゐるやうに、外の窓はもう約束してしまつたのだ。

ニーゲルスは監督書記に感謝した、そしてクリ

スマス後の三日目の早朝兵士等が未だ到着せず、家の戸が閉つてゐる中に鐵市場の彼の家に行くやうに約束した。何故ならば鐵市場で書札描きのハンスが燒かれるのであつたからだ。

基督降誕祭の前夜、市長が北橋を渡り、聖ヤコブ教會に彼の歩足を運んでゐるのが見られた。それは非常に冷たかつた。そして雪が彼の足許にひゅうゝと音をさせた。人々は振返つて見た、そして市長が何處へ行くのか怪んだ。彼がブルンクベルグの降坂の拔道に來た時に、彼は注意深く周り

を見廻した。そして自分が氣付かれなかつたと信じた時に、彼は急いで球菜畑の間の狹い道を行つた、そして小さい庭で圍まれた清楚(さっぱり)した赤色に塗られた小舍の前に立つた。庭木戸の前には赤揚の枝の束を滿載した大きい橇があつた、赤楊の枝の先きには基督降題祭樹がのかつてゐた。

市長は戸を叩いた。さうすると小さい脂氣のなくなつた年寄りが優しい顏附をして出て來た。

――是は勿體ない、市長樣、お入り下さい、お

入り下さい、其處の冷えます處ではいけません。

市長は少し後へ退つた、そして入らなかつた。彼は橇の荷に指差しゝていつた、

――それだね!

――左樣で御座ります、そして其等は手前がソルナからとつて參りました極上等の赤楊で御座ります、然し檜の薪木は港から有つて參りました、その中の六荷は一束三片半で御座りました、木羽のやうに乾いておりますので、秋の中に挽いておき

ましたもので御座りますから。

――それは宜しい（と市長はいつた）だが私のいふことを一寸きいておくれ。木と枝とは充分に好く燃えるかね、今時にだよ、基督降誕祭で法王の使節が此處にゐられる時には、吾々は普通以外の事をしなければならないのだからね。吾々は眞當に眼を奪ふやうな、感じを考へるやうな見事な積木を欲しいんだ。

――全くもう基督降誕祭の焰で御座りますとも、

と愛嬌のある爺さんは遮つた、そして市長の欲するものを想像の中で實現することを欲するかのやうにその眼を閉ぢた。

――左樣だ、何とでも好きなやうに呼ぶが好い、だがそれをわしがいふやうに列べるんだ、藁の二荷を下にして。

――燕麥の藁で御座りますか、それとも何を？

――そんなことはどうでも宜しい、それから硫黄を五ポントほど藁の間にまくんだ。

――それは見えないやうにで御座りますね、左様、左様。

――枝を其の次へ、木は四隅へ積まなければならない、積木と積木との間には兩側にタールを二桶だけおくんだ、それから全體を一度に燃やすやうに六人の助手をお前はつれるんだ。

――それは好い音が致します、然し私はあすこの建物がこんな暑さに耐えられるだらうとは存じませんが、タールが八桶で御座りますからな。

――それは石造の家だよ、思ひだして見るが好い。

――左様、左様で御座りましたな、然し彼奴は確かに咽せ殺される前に一言もいふことが出來ないで御座りませう、そして人民は何時も初めには少し諜舌るのをきゝたがるもので御座りますが。

――彼は嚴重に話すことを禁じられてゐるのだ。藁と硫黄を何んの爲めにいるかはそれなんだ。まあ好い、わしがいつたことをすれば好いのだ、そ

してそれだけだ。解つたかね。

彼は解つた。

――さよなら、さよなら

と市長はいつて去つた。

刑吏は點頭して自分の小舍の開きの處に立つて

ゐた。

降誕祭週間の第三日は非常に冷めたく、そして晴れた。鐵市場はその樣子を變へた。頭手架は取去られた、そして柱の周りに非常に大きい、木の積重ねがその場所にたつた。道路が鐵市場に開けてゐる場所は兵士等に守られた、そしてそれに通ずるすべての道路は人民を以てみたされた。家々

の戸は閂をかけられた、然し窓には市會議員や大官の妻や娘が毛皮をきて坐はつてゐた。何故ならば雲母硝子や角の窓が眺めをぼんやりさせない爲めに取りはずされたからであつた。屋上には妻、子供、丁稚、小僧をつれた市民が坐はつてゐた。彼等は永い間待つのと寒氣とに堪ゆる爲めに食物の籠や酒の壜を有つてゐた。中央には刑吏と六人の助手とが皆々火絨箱と火絨とを用意してゐた。

市場は片側でいはれたことが對側にきこえるほ

ど狹かつた。

――おゝい、(と破風に腕掛け、手に息を吐きかけてゐた理髮店の丁稚がいつた)直ぐに火をつけないなら、俺は行くぜ、何故つて指が凍えつちやあ。

屋根といふ屋根の上で尾長鳥の群の騷ぎのやうな笑聲した、然し窓の貴婦人達は彼等の顏の前に毛皮のマッフをあてゝゐた。

市場の東側の時計が今十二を打つた。北のドミック派の僧院の風琴が鳴り始めた。然し群集のぶ

つ〳〵いふ聲の爲めに唯低音調だけがきこえた。

其時監督書記の家の破風の落戸が開いた、そしてニーゲルスの赤鬚頭が外を見た。

――アティックに火をつけるなよ

と馬具造りが彼の赤鬚を諷示して對側の屋根から叫んだ。ニーゲルスは明かに彼を惱ました哄笑の轟きと非常なる注意を以て迎へられた。それを彼は物ともしないやうに體を半分突きだして、天氣模樣を調べるやうに上を見た。其時彼の眼は落戸

の上の壁の中に縛附けられた荷物を捲きあげる爲めの梁の上に落ちた。彼の虚榮心は頭を擡げた、そしてもつと望ましい注意をひく爲めに、彼は大膽な輕業を決心した。何時もに似合はぬ敏捷を以て彼は梁を掴み、體と回轉させてその上に跨かつた。

賞讃の騷音が屋根から起つた、そして或る女達は手布を振つた、然しそれは馬具造の猜みを起こさした。

――何のことだ、此の寒さに木馬に乗らうといふのかい

と彼は叫んだ。

然しニーゲルスは腕を胸の上に組み、壁に背をもたせかけた。

今や兵士等は見物人の間に道を明けた、そしてグライフリアルが行列をなして現はれた。太鼓を叩く音が西の大本道からきこえた。何かを見やうと頸をのべる兵士や見物人の間に動搖があつた。

騷ぎが近くなつて來た。兵士等はその列を開けた、そして定罪された男が現はれた。彼の上衣の上には炎を現はす赤色の布を縫附けた黄色い布の衣服が掛けられてあつた。彼の頭には『異端』と大文字で描かれた羊皮紙の背の高い帽子かのかつてゐた。彼の後にはドミニカンの出家達が頭巾を冠つて蠟燭と十字架とを有つて來た。彼等は御供をつれた市長及び知事に依つて從はれた。

燃料が兵士の封鎖錄に圍まれた時に、ハンスは

その上に連れられ、そして棒に鎖られた。其時知事は前に進み出て判決文を讀んだ。ハンスは非常に落着いてゐた、そして彼は最早この世のことを考へてないやうに魂が去つたやうな樣子をしてゐた。

太鼓の合圖で刑吏とその部下は火をつけた、次の瞬間には小さい青い炎が受刑者の足の周りに踊り始めた。彼は彼の頭を擡げ、一寸咳をし、倒れた、そして棒から振下り、硫黄の瓦斯で窒息した。

不贊成と失望の不平の聲が見物人の塊りの中を走つた。狂熱的熱心に促され、恰も合圖を與へられたやうにドミニカンの出家達は火の架に燃えてゐる蠟燭をなげた。藁が燃えあがつた、枝の束が爆聲をおこした、タールの桶が火になつた、そして其間屋上の見物人は陽氣に叫んだ。全市場中が火と烟の柱を以てみたされた。

然し陽氣な叫びは梁の上のニーゲルスから恐怖の叫びを以て答へられた。風は彼の方に炎を追捲

つた、そして彼が落戸を通つて逃げやうとした時に、彼はそれが閉つてゐるのを見出した。彼は軒垂木にとゞくことは出來なかつた、そして熱の中に腕で以て振下つてゐた。彼の長靴の濕氣のある皮が攣れに萬力のやうに彼の足を壓した。彼の外套の頸ボタンが彼を燒いた、火は彼の煤だらけの顏から眼を突き出さした。彼の赤い鬚は焦げ、爪はぬけた。到當叫聲をあげ、自分の握をはなした、そして彼の頭を屋標の鐵の桿に打つけて倒れた。

然し今は誰も彼が倒れたときには既に死んでゐた彼のことを考へる時を有たなかつた。火熱は益盛になつて來た。燒かれた異端の體は赤熱の鎖の上に黑い塊となつて下つてゐた。檜が火になつた。風は烈しくなつた、火花と烟の大きい雲をもちあげた。積薪の近くにゐた出家達は家の中に逃げこんだ。其の所有者は既に窓から這込んで仕舞ひ、誰も戸を開けることが出來なかつた。兵士等の列は動かずにたち、近處の道路を塞いでゐる大群集

で遮ぎられ、動くことが出來なかつた、火は益々烈しくなり、助を呼ぶ叫びは益々高くなつた。最も近くの家々は燒け始めた、屋標が火をとり、市場の時計は其の手が火熱の中で縮められてゐたが濁つた音をだし始めた、そして恰も裁きの日が近付いて來るやうに時間を打つた、そして時はすぎた。

畫札描きの戸口の上の石の獸の頭が大きい爆聲と共にこな〳〵に碎け、屋根瓦が碎け、壁土が壁

から落ちた。炎が減じ、そして兵士等が到當漸くで出家を救ふ爲めに人民の塊の中に彼等の槍を以て道を作つた時には、汚れた雪が死に、又死に瀕したグライフリアルと黒衣のドミニカンを以て蔽はれてゐた。

然し其後で此の事件を論ずるゐめに酒場に集つた人民は種々の意見を語つた。

――大僧正が來なかつたといふことは殘念だつた。

――恐らく彼は危險を嗅ぎ分けだんだらう

――眞晝中に燔かれるといふのは灰色の衣服の

不運であつたのだ。

――不運だ！ 彼等は自分達に火をつけたのだ、いや、書札描きの方がもつと可哀相であつた、彼はあんなに美事な遊戯牌を作つた。君は君が彼を見失つたといふことをすぐに思付くだらう。

ムルホクツトスの殉教者
附奥

不許複製

大正五年五月十三日印刷
大正五年五月十五日發行

〔定價金五拾錢〕

譯者　小泉鐵

發行者　東京市麹町區平河町五丁目三十六番地　河本龜之助

印刷者　東京市麹町區平河町五丁目一番地　河本俊三

印刷所　東京市麹町區麹町二丁目九番地　洛陽堂印刷所

發行所　東京市麹町區平河町五丁目三十六番地　洛陽堂

電話番町四二五八
振替東京二〇九一四

71
658

終